

『天草版平家物語』における係助詞「こそ」の 用法に関する見解

——安田章氏の論文「コソの拘束力」を中心にして——

近 藤 政 美

1 はじめに

拙著『天草版平家物語の原拠本、および語彙・語法の研究』について小林千草氏から書評（『日本語の研究』第5巻4号¹⁾）を賜った。その中に係助詞「こそ」に関して次のような指摘がある。

第三章は付属語の計量的考察であり、その〔I〕では、「助動詞の基幹語彙」を扱う。私たちが『天草版平家物語』を読んでいて、「た」が多い、あるいは『高野本平家物語』を読んでいて、「けり」が多いなどととらえる感覚的印象が、きちんとデータ上で示されていて、計量的考察の強みがいかに発揮されている。

第三章の〔II〕は「助詞の基幹語彙」に関する計量的考察で、ここでも数字を基にした手がたい指摘がなされている。……(7)95頁の上段。

本書中、係助詞「や」「か」「こそ」に言及された節も面白いところであるが、「こそ」については、安田章氏の「コソの拘束力」（『国語国文』昭和五五年一月号。三省堂刊『外国資料と中世国語』に所収）を、注にでも引用されるとより親切であったかと思う。(7)95頁の下段。

そして、また、安田章氏自身の発展的論文「アドリブの意味」（『国語国文』平成一八年一月号）を、近藤氏が二〇〇八年（平成二〇年）刊の本書において紹介かつ深められる場があったら、『天草版平家物語』研究史という視点からも面白かったのではないかと考えている。(8)94頁の下段。

『天草版平家物語』（以下〈天草版平家〉と略称）は、和漢混交文の『平家物語』を室町時代末期の話し言葉に訳したものである。

イエズス会の外国人宣教師たちがキリスト教の布教活動、特に日本人に対する説教を有効に行うためには日本語の話し言葉を学ぶ必要があった。この書はそのためのテキスト

トとして編集された。不干^{ふかん}ハビヤンが「この平家をば書物のごとくにせず、兩人相対して雑談^{ざふたん}をなすがごとく、ことばのテニハ^{しよじや}を書写^{しよじや}せよ」と言う師の命令に従って、平家の物語^{うま}を右馬^{じよう}の允^{うま}が尋ねて喜一^{きいち}檢校^{けんぎよう}が語るといふ、対話体の問答形式で綴っている。

1592年（文祿元年）の天草学林（熊本県）刊行の序文には、ハビヤンの「この物語を力の及ぶところは本書^{ほんじよ}のことばを違えず書写し抜き書きとなしたるものなり」とある。

2 「あり明^{あけ}の月」の和歌（平忠盛）の「こそ〈係助〉」の拘束力

安田論文では、ハビヤンが序文に記した「雑談^{ざふたん}をなすがごとく、ことばのテニハを」という方針で、「こそ〈係助〉」について調査している。が、除外した韻文の中に取り上げるべき用例があるようだ。『金葉和歌集』²⁾ から引用した次の和歌（平忠盛）は、「こそ」の拘束力を論ずる場合に重要である。

あり明の月も明石の浦風に浪はかりこそよるとみえしか 〈竜大本〉

鳥羽院の問いかけに対して平忠盛は和歌で答えている。それには下の句に「こそ…しか（已然形）」という係結の終止が見られる。

〈竜大本〉の「しか」に対応する語を〈天草版平家〉で「xiga（しが）」と、最後の音節を濁音にしている点に注目したい。

Ariaqe no tçuqi mo Acaxi no vracaze ni, nami bacari coso yoru to miyexiga.

〈天〉10-5、6（頁・行を示す）/cosoのsは古体字。

〈天草版平家〉を漢字・平仮名まじりに翻字した『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』³⁾の初版本、およびその誤謬などを訂正した再版本は、共に下の句が次のようになっている。

……波ばかりこそよると見え^{gā}しか。

凡例を適用すれば、「xiga」は誤植と解されていることになろう。

『天草版平家物語』および『平家物語』諸本の調査

『天草版平家物語』は世界に一本だけ伝えられている、言わば世界遺産的意味合いを持つ書物である。昭和62年の夏、私は『天草版平家物語語彙用例総索引』⁴⁾を作成するため、日本にもたらされた写真版の『天草版平家物語』（勉誠社文庫7・8）⁵⁾の不鮮明な約500箇所を原本と照合する目的で大英図書館（大英博物館から独立）を訪れた。調査結果は同総索引の(1)影印・翻字篇の「天草版平家物語の翻字 注記」（835

頁～855頁)で報告した。

また、『平家物語』諸本(100種余り)の古写本・古版本を原本・写真・影印本によって調査した。そして、それらの本文を〈天草版平家〉の独自で作成した翻字文と対照して、原拠本との距離の遠近を推測した。結果を表示すると、次のようになる。

表1 〈天草版平家〉の原拠本の本文と、現存の『平家物語』諸本との関係

平家物語 (十二卷)／ (天草版平家) (頁・行)	〈天草版平家〉の原拠本に近い諸本の例		〈天草版平家〉の原拠本との距離 ^{へだたり}	備考
[イ] 巻一～三 (3①～107⑨)	〈竜大本〉〈高野本〉 〈西教寺本〉など		かなり近い	一方流(〈早大本〉の類)・百二十句本(〈斯道本〉の類)の語句が関与
[ロ]の前部 巻四～七 (107⑩～ 196⑩) [ロ]の後部 巻九～十二 (228⑤～ 408⑬)	〈斯道本〉 (漢字片かな交じり本)	一次本文 (巻八は欠)	極めて近い	一方流(〈竜大本〉〈西教寺本〉など)の類の語句が関与
		二次本文 (断片)	最も近い	
	〈小城本〉 (漢字片かな交じり本) 〈鍋島本〉(平がな本)		かなり近い	
[ハ] 巻八 (196⑪～ 228④)	〈竹柏園本〉〈平松本〉		近い	一方流(〈竜大本〉〈西教寺本〉など)・百二十句本(〈斯道本〉の類など)の語句が関与か

私の調査した『平家物語』の古写本・古版本などは室町時代から江戸時代にかけての時期のものが多く、大部分は濁点が記されていない。その中から「浪はかりこそよるとみえしか」(竜大本)の最後の音節の清濁を論ずるのに関連する諸本を3分して主要なものを抜き出した。

(a) 「バカリコソ」には濁音表記があるが、「見エシカ」の「カ」に濁点が付されていない。

○百二十句本系…〈斯道本〉見ヘシカ。この節の〈追記〉を参照。

○平家正節…〈愛知県大本〉見えしか。

(b) 「見エシカ」の「カ」に清音で読むべき注記がある。

○平家正節…〈東大青洲本〉みえしか^ス。○平曲正節…〈京大本〉見えしか^ス。

「ス」は清音の符号。

(c) 「見エシガ」の「ガ」に濁点が付されている。

○百二十句本系…〈小城本〉(慶長ごろ写)見ヘシガ。〈鍋島本〉(慶長ごろ写)見えが。

○天理本 75 (江戸初期写) みえしが。

○延宝五年 (1677) 整版本 みえしが。

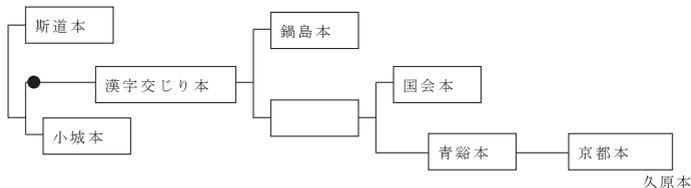
○元禄十二年 (1699) 整版本 見えしが。…愛知県立大学図書館蔵本

○享保十二年 (1727) 整版本 みえしが。

百二十句本系の〈小城本〉〈鍋島本〉は〈天草版平家〉の成立した時期と余り隔たりのない慶長ごろの書写で、近年まで九州地方に伝存されてきた。延宝五年整版本以下の刊本はいずれも上方の書肆によるものである。

山下宏明氏は『平家物語研究序説』⁶⁾において、百二十句本系として〈斯道本〉以下の7本をあげられ、これらの関係を下記の図のように推測された。ただし、〈久原本〉の位置付けがなされていないので、仮に欄外に添えることにする。また、図中の●印は近藤の推測による原拠本の位置である。

[ロ] (巻四～七) (巻九～十二) の範囲の原拠本の推測図 (●印)



これは諸本論の立場から現存本をもとにして作成した仮の図である。したがって、山下氏が私に語って下さったように、新本が発見されれば修正されることもあろう。が、現段階ではこの図を用いて論を進めたい。

〈天草版平家〉の表1に示した[イ]の範囲の原拠本に近い〈竜大本〉などの類には「みえしが」の確実な例が見つけられない。が、〈天草版平家〉の[ロ]の範囲の原拠本は現存諸本の中では〈斯道本〉に最も近い。〈斯道本〉は本文・振り仮名ともかなり多くの濁点が施されており、それは和歌にも及んでいる。が、忠盛の和歌には濁音と予想される

文字（「ハカリ」の「ハ」など）にも濁点が付されていない。

しかし、〈小城本〉〈鍋島本〉に「シガ」「しが」と各々に濁点が付されている、〈斯道本〉も濁音を含むことを否定できない、などから原拠本も「(xiga) シガ」と読むことが予想できる。

このように考えると、〈天草版平家〉のこの和歌は「コソ…シカ（已然形・終止）」の係結の拘束力が弱化し始めており、「(xiga) シガ」は誤読ではなく、「こそ…しが」はこの時代の音韻・文法・表記の変化を反映しているものと考えたい。文法、意味の上からは井上章・鎌田広夫両氏の論文がある⁷⁾。

〈追記〉 その後、次の用例を発見したので添加する。

〈天〉（仏御前が妓王御前に、妓王が清盛に召されて）今様を歌はせられたにも、思ひ知られてこそ ござったれ、その後は……。

● 〈斯〉 …思シラレテコソ侍ヒシガ、其後……。

〈小〉 …思知レテ社候シガ、其後……。

〈早〉 …おもひしられてこそさふらひしか、その、ちは……。

3 「ゾ〈係助〉」から「こそ〈係助〉」への表現の書き替え

安田論文では、ハビヤンが原拠本の「コソ〈係助〉」の8割ほどを〈天草版平家〉の対応箇所を用いているが、他方で独自に追加したものもあると述べ、次の用例(1)（会話文）をあげている。

〈天草版〉 …門違ひでこそあるらうと言うて……（308-16）

〈斯道本〉 …門違ヒニテソ候ラントテ……（596-8）

小林千草氏の書評 98(4)頁に示した〈天草版平家〉の表1の[ロ]の範囲で、原拠本に極めて近い百二十句本系の〈斯道本〉、および〈小城本〉〈鍋島本〉の3本を中心にして、安田論文のゾ〈斯道本〉→こそ〈天草版平家〉に相当する例を調査した9例（備考1例を加えて）をあげることにする。

なお百二十句本系の3本の「ゾ〈係助〉」に対応する〈天草版平家〉の「こそ〈係助〉」は〈斯道本〉10例、〈鍋島本〉1例、合わせて11例（会話文8、心内文1、地の文2）である。また、「ゾ・ぞ」〈係助〉は〈斯道本〉以下の古写本には濁点が記されていないものもある。

(1) (会話文)

- 〈天草版〉(滝口入道が横笛に) 急いで人を出いて、全くこれにはさやうの人はおり
ない：門違ひでこそあるらうと言うて……、308-16
〈斯〉…、全く是ニハサル人ナシ、門違ヒニテソ候ラントテ、596-8
〈小〉…、門違ヒニテゾ候ラントテ、
〈鍋〉…、かどたがひにてぞ候らんとて、
〈平〉…、門違ニテソ有ラントテ、
〈高〉…、門たがへでぞあるらむとて、
〈米〉…、門たがへでぞあるらんとて、
○参考 「でぞあるらん」〈米〉などは他にもある。

(2) (会話文)

- 〈天草版〉(猪俣が敵の越中の前司に手籠めにされかけて) そもそも御辺は平家の方
では定めて名ある人でこそあるらう：274-2
〈斯〉抑御辺ハ平家ノ方ニテハ、定テ名アル人ニテソヲハスラン。538-11
〈小〉抑御辺ハ平家ノ方ニテハ定テ名アル人ニテソヲハスラン。
〈鍋〉そも、御へんは平家のかたにては、さだめてなある人にてぞおはすらん。
○参考 〈天草版平家〉(三位の入道の嫡子仲綱から木の^{した}下(馬の名)に関する宗盛
への返信) やがて召しこそ上せうずれと返事せられたれば、115-22
〈斯〉ヤカテ召コソ上セ候ハント返事セラレタリケレハ、257-4
〈小〉〈鍋〉は上記と同文。
〈平〉聽テ召社上セ候ハメト返事セラレタリケレハ、〈享〉は左記と同文。

(3) (会話文)

- 〈天草版〉(義経の従者義盛が平家側の阿波の民部の子の教能をだまして従わせよう
として) その中に新中納言、能登殿ばかりこそ好うはござったれ：340-6
〈斯〉…其中ニ新中納言、能登殿ハカリソ好ハヲワセシ。654-8
〈小〉(卷十一は欠)
〈鍋〉…其中にしん中なごん殿と、のと殿ばかりぞよふはおはせし。
〈竹〉又其中ニ新中納言殿ト、能登前司計社吉ハ御在セシ。

(天理図書館善本叢書第46巻) 325-9

(4) (会話文)

- 〈天草版〉(平家の兵が捕えた長兵衛^{のぶつら}信連のことを) まことに一人当千ともこの者を
こそ申さうずれなどと、口々に申せば、113-23

- 〈斯〉アレヲソ一人当千トモ申サンスランナト、口々ニ申セハ、 255-5
 〈小〉アレヲソ一人当千トモ申サンスランナト、口々ニ申セバ、
 〈鍋〉あれこそ一人たうぜんとも申さんずらんなど、くちぐちに申せば、
 〈青〉あれこそ一人たうぜんとも申さんずらんなどと、くちぐちに申せば、
 ○参考 〈高〉これをこそ一人当千のつは物ともいふべけれどとて、〈竜〉左と同文。

(5) (会話文)

- 〈天草版〉頼朝（が文覚に）見るところがあつてこそ乞ひ受けられつらう：394-10
 〈斯〉鎌倉殿見ル處有テソ乞請玉フラン。760-10
 〈小〉鎌倉殿見ル處有テ^{コウケ}乞請玉フラン。
 〈鍋〉かまくら殿みる所ありてぞこひうけ給ふらん。

(6) (心内文)

- 〈天草版〉（源平の合戦で熊谷直実が組み伏せた平敦盛を）これは平家の公達でこそおはすらう：……助けまらせうずると思ふ心が付いて、276-16
 〈斯〉是ハ平家の公達ニテソ御座スラン。……ト思フ心ソ付キニケル。548-8
 〈小〉是ハ平家の公達ニテソ御座スラン。……。
 〈鍋〉これは平家のきんだちにてぞましますらん。……。

(7) (地の文)

- 〈天草版〉兼平が討たれて、そののちこそ粟津の軍は止^トでござれ。248-17
 〈斯〉今井討レテ、其後ソ粟津ノ軍ハナカリケル。500-6
 〈小〉今井討レテ、其後ゾ粟津ノ軍ハ無リケル。
 〈鍋〉いまもうたれて、其のちぞあはづのいくさははてにける。
- 〈竜〉（今井四郎…うせにける。）さてこそ粟津のいくさはなかりけれ。
 〈米〉（今井四郎…うせにける。）さてこそ粟津 軍はなかりけれ。

(8) (地の文)

- 〈天草版〉（三位の中將維盛は）泣く泣く月日を送られたにこそせめて志の深いほどあらはれた。289-1
 〈斯〉泣々月日ヲ送り玉フニソ責メテノ志ノ深キ程モ顯レケル。567-8
 〈小〉泣々月日ヲ送り玉フニソ責テノ志ノ深キ程モ顯レケル。
 〈鍋〉なく、月日ををくり給ふにぞせめての心ざしのふかきほどあらはれける。

上記の用例を整理して示すと、次のようになる。

表2 表現の書き替え（ゾ〈係助〉→こそ〈係助〉）

	(a) 原拠本・文語	(b) 〈天草版〉・口語
(1) (会話文) 〈参考〉	〈斯〉ゾ〈候〉ラン・連体形終止	こそ〈ある〉らう・●終止形
	〈高〉ぞ〈ある〉らむ・連体形終止	こそ〈ある〉らう・●終止形
(2) (会話文) 〈参考〉	〈斯〉ゾ〈ヲハス〉ラン・連体形	こそ〈ある〉らう・●終止形
	〈平〉社…〈候ハ〉メ・已然形終止	こそ…うずれ・
	〈竹〉社…〈候ハ〉ン・連体形終止	▼已然形終止
(3) (会話文) 〈参考〉	〈斯〉ゾ〈ヲワセ〉シ・連体形終止	こそ…〈ござつ〉たれ・ ▼已然形終止〈問答体、丁寧〉
	〈竹〉社〈御在セ〉シ・連体形終止	こそ…〈ござつ〉たれ・ ▼已然形終止〈問答体、丁寧〉
(4) (会話文) 〈参考〉	〈斯〉ゾ…〈申サンズ〉ラン・連体形 終止	こそ…〈申さ〉うずれ・ ▼已然形終止
	〈鍋〉〈あれ〉こそ…〈申さんず〉らん・ ▼連体形終止	こそ…〈申さ〉うずれ・ ▼已然形終止
	〈高〉〈これを〉こそ〈いふ〉べけれ・ 已然形終止	
(5) (会話文)	〈斯〉ゾ…〈乞請玉フ〉ラン・連体形 終止	こそ…〈乞ひ受けられつ〉らう・ ●終止形
(6) (心内文)	〈斯〉ゾ…〈御座ス〉ラン・連体形終止	こそ…〈おはす〉らう・ ●終止形
(7) (地の文) 〈参考〉	〈斯〉ゾ…〈ナカリ〉ケル・連体形終止	こそ…〈止うで〉ござれ・ ▼已然形終止〈問答体、丁寧〉
	〈竜〉こそ…〈なかり〉けれ・已然形 終止	こそ…〈止うで〉ござれ・ ▼已然形終止〈問答体、丁寧〉
(8) (地の文)	〈斯〉ゾ…〈顕レ〉ケル・連体形終止	こそ…〈あらはれ〉た・●終止形
備考 卷二に 相当の例 (9) (心内文)	〈竜〉誠の契はおやこの中にぞありける。 ・連体形終止	〈天〉まことのちぎりは親、子の 中にこそあれ。 ▼已然形終止

□ 『平家物語』の百二十句本系諸本に「ゾ〈係助〉」が用いられているのに、〈天草版平家〉の対応する文の該当する位置に「ぞ〈係助〉」が用いられていないものが多い。これらを点検してみると、例(1)のように「こそ〈係助〉」が用いられていることもある。又それらは(会話文)に目立ち、(心内文)(地の文)にもわたっている。他に例(2)(6)(7)。

これらの中には、例(2)参考の〈平松本〉〈竹柏園本〉の「コソ」や例(4)参考の〈鍋島本〉のように「こそ」になっているものもあるが、〈天草版平家〉への変化の中間的過程を示すものと言えよう。あるいは原拠本がそうなっていて受け継いだものがあるかもしれない。

㉓ 原拠本に極めて近い〈斯道本〉では「ゾ〈係助〉」の結びは文語の「ラン」(連体形)が多い。又、〈天草版平家〉では「こそ」の結びは「らう」(口語・終止形)が多い。ただし、語形が合一化した連体形もこの終止形の中に含む。

㉔ 〈天草版平家〉の例(7)「こそ…ござれ(已然形終止)」は問答に用いられる丁寧表現の形式である。喜一. が右馬の允に『平家物語』を敬意をもって語り聞かせるもので、
㊶外側の大枠の用法に準ずる。又、主として『平家物語』の内容の展開を語る範囲は
㊷の内枠に入る。(5節を参照)

㊷の内枠での用法は換言すると、次のようになる。

(ア)『平家物語』の内容の展開の中で、(地の文)において喜一. が右馬の允に付け加えて話を結ぶ言葉。例(7)。

(イ)『平家物語』の内容の展開の中で、登場する人物の会話文で。例(1)(3)。

㉕ 〈天草版平家〉の「こそ〈係助〉」の已然形終止の拘束力は弱化が進んでいた。その状況を表2のように整理して、原拠本に近い『平家物語』の古写本などと比較しながら考察してみよう。

(i) 用例(3)(4)(7)の3例は、〈天〉の「こそ」の結びが「たれ〈助動〉」「うずれ〈助動〉」「ござれ〈動四〉」で、いずれも已然形終止である。

(ii) 用例(1)(2)(5)(6)の4例は原拠本に近い〈斯道本〉の「ゾ〈係助〉」の結びでは「ラン〈助動〉」連体形が全部一致する。これらと対応する〈天〉の「こそ〈係助〉」の結びが「らう〈助動〉」である。この語は終止・連体の両形が合一化していたので、終止形として扱う。

(iii) 用例(8)は〈斯〉の「ゾ」の結びが「ケル〈助動〉」連体形で、〈天〉は「こそ〈係助〉」の結びが「た」終止形である。

(iv) その他、原拠本に近い『平家物語』の古写本などにも、「こそ〈係助〉」の結びとして已然形終止や終止形・連体形が見られる。

(2) 〈斯〉ゾ…(ヲハス)ラン〈連体形終止〉

// 〈平〉社^{こぞ}…(候ハ)メ〈已然形終止〉// → 〈天〉こそ…(ある)らう〈終止形〉

(3) 〈斯〉ゾ…(ヲワセ)シ〈連体形終止〉

// 〈竹〉社^{こぞ}…(御在セ)シ〈連体形終止〉// → 〈天〉こそ(ござっ)たれ〈已然形終止〉

(4) a 〈斯〉ゾ(申サズ)ラン〈連体形終止〉

// 〈鍋〉こそ…(申さんず)らん〈終止形〉// → 〈天〉こそ(申さ)うずれ〈已然形終止〉

(4) b 〈斯〉ゾ… (申サンズ) ラン 〈連体形終止〉

// 〈高〉こそ… (いふ) べけれ 〈已然形終止〉 // → 〈天〉こそ… (申さ) うず
れ 〈已然形終止〉

4 「沖にこそ沈ませられた (終止形)」

〈天草版平家〉(六代御前が) わが父 (平維盛) はこの沖にこそ沈ませられたとて、

404-5

● 〈斯〉我父ハ此ノ奥ニ^{ヲキ}コソ沈ミ玉ヒヌトテ、771-8

〈斯〉「コソ…ヌ (終止形)」を安田論文では「コソ…ヌレ (已然形終止)」の係結の崩れたものとまでは、直ちに言い切れないと思うと述べ、その理由として下記の (参考) の(a)(b)の2例を上げている。私も百二十句本系諸本の〈小〉〈鍋〉をも加えて調査した限りでは同意できると思う。しかし、表1の〔イ〕の範囲の原拠本に近い覚一本系の〈竜〉〈高〉などと校合することによって崩れたものの原拠の文が次の○印のように成立し、口語訳して〈天草版平家〉へと継承することになったと考える。

〈小〉我父ハ此ノ奥ニ^{ヲキ}コソ沈ミ玉ヒヌ (終止形) トテ、

〈鍋〉わかちゝは此おきにこそしつみ給ひぬ (終止形) とて、

● 〈竜〉我父はいつくに^ツ沈み給ひ けむ (連体形終止) と、

〈高〉我父はいつくに^ツ沈 給ひ けん (連体形終止) と、

○我父ハ此ノ奥ニ^{ヲキ}コソ沈ミ玉ヒ (ヌ一削除) → [けむ一添加] トテ、

(参考) 次の2例も安田論文のように、原拠本を一本とする方法では説明できない。

〔表1〕に示した原拠本に近い諸本と校合することにより、原拠に近い文が成立し、口語訳して〈天草版平家〉へと継承することになったと考える。

(a)

〈天草版平家〉(源三位入道頼政の嫡子の仲綱は平宗盛に) やがて召しこそ上せう
ずれ (已然形終止) と返事せられたれば、 115-21

● 〈斯〉ヤカテ召シコソ上セ候ハン (終止形) ト返事セラレタリケレハ、

〈小〉上と同文、〈鍋〉上と同文。

○ 〈平〉臈テ召社上セ候ハメ (已然形終止) ト返事セラレタリケレハ、

〈亭〉上と同文。

〈竹〉則召社上セ候ハン (終止形) ト被^ニ返事^ニケレハ、

(b)

〈天草版平家〉われこそ（法皇の）お行方^{ゆくへ}を存じたれ（已然形終止）と申す女房
は一人もごぞなかつた。180-11

● 〈斯〉我こそ御行未知りマイラセタリ（終止形）ト云女房一人モワセス。

452-10

〈小〉上と同文。〈鍋〉上と同文。

○ 〈竜〉われこそ御ゆくゑしりまいらせたれ（已然形終止）と申さるゝ人一人も
おはせず。（大系・上）95-9

〈高〉上と同文。

〈亭〉我こそ御行方知進タレ（已然形終止）ト申サルゝ人モ御座ス。

これらの文は原拠本に近いものが3種あったとして、それらの諸本を校合することにより原拠の文を推測し、口語訳して〈天草版〉の文へと継承したものと考えた。これに対して、安田論文では原拠本を〈斯道本〉一本として、これを口語訳するにあたって〈天草版〉のように是正したものとしている。このような解釈には私は同意できない。

5 文の構造と「こそ…ござれ」（已然形終止）

〈天草版平家〉は前述のように原拠の『平家物語』を口語訳し、問答形式の対話体にして抄録している。が、第一に喜一が右馬の允に平家の物語を語って聞かせるための導入とか総括などをしたりするという外側の大枠（アドリブ）があり、第二に平家の物語の世界を展開させるという内側の枠があるという、二重構造になっている。第一の部分は平家の内容に直接関わるものが少なく、表現も伸び伸びと綴られ、二人の登場人物の雑談といった気持で書いている。これに対して第二の部分では、平家の物語の内容が中心になるので、原拠本の表現が影響し、語彙・語法も口語体に訳すことが重視されるようになっている。

又、ここで注意すべきことは、〈天草版平家〉で係結の形式が残存しているのは「こそ…已然形終止」のみである。しかも3節の説明のように、これらは係結風であるが、実態は強調の一形式にすぎない。よく言われるのは、「ぞ」「や」「か」の係結の連体形終止であるが、一般的には疑問の意の「か〈終助〉」に置き換えられている。

④ 第一の大枠は喜一が自分より高い地位の右馬の允に対して謙虚で丁寧に話す時に「ござる」を用いる。その強調表現が「こそござれ」である（『ロドリゲス日本大文典』⁸¹による）。

応答の中に次の2例が見られる。

- ① 喜一. さても飽く期もない人でこそござれ。 160-1
- ② 喜一. はあ、これはかたじけない。冥加もないお茶でこそござれ。 285-1
〈参考〉承諾・相づちのような場合、「こそ」を用いないことが多い。ただし、丁寧な言い方であることに変りはない。
- ① 喜一. やすいことでござる。 3-11
- ② 喜一. そのことでござる。 18-12
- ③ 喜一. (平家は)まことに天道から離されたと、見えてござる。 177-19

これらによって二人が問答をしている環境も推測できる。

⑥ 第二は内枠に相当する範囲で見られる「こそ…ござれ」である。次の(ア)(イ)の2種に分けてみる。

(ア) (地の文)で、喜一. が右馬の允に対して敬意を添え加える言葉という点では④と共通する。

- ① 例 3節の(7) (〈原〉ゾ→〈天〉こそ)。
- ② 〈天〉平家は水島の軍に勝つてこそ前の恥をすすがれてござれ。 210-13
〈享〉平家ハ水嶋渡軍ニ勝テコソ会稽ノ恥ヲハ雪カレケレ。
〈竹〉平家水島ノ軍ニ勝テコソ会稽ノ恥ヲハ雪メケレ。
〈小〉平家ハ備中ノ国水島ノ軍ニ勝テコソ会稽ノ恥ヲハ雪ケレ。

〈参考〉(地の文)で、原拠本には「こそ」が用いられていないのに、〈天草版平家〉の該当する箇所には「ござる」の存する場合がある。喜一. の右馬の允に対する丁寧な気持ちを表わす言葉である。

- ① 〈天〉(その道すがら人数が荒れたによって)民百姓もあまた逃げ去つてござる。 161-23
〈斯〉…人民多逃散ス。 422-3
〈竜〉…人民こらへずして、山野にみな逃散す。(大系・下) 63-12
- ② 〈天〉(嗣信は)これを最後の言葉で、二十八と申すに、遂に死んでござる。 334-11
〈斯〉(次信ハ)是ヲ最後ノ言ニテ、廿八ト申ス…、終ニ死ニケリ。 646-5
〈鍋〉これをさいごのことばにて廿八と申す…、つゝにしに、けり。

これらの「こそ」は④大枠で設定された、二人が雑談をしながらというのと同じ環境での用法である。

(イ) 物語に登場する人物の(会話文)で、次の2例は共に〈原〉コソ→〈天〉こそ。

これらは「候ふ」などの語が「ござる」に訳されている。『平家物語』の中で話しあう二人の人物で、身分の低い者が高い者に対して敬意を表す語と言う点では①と共通する。

- ① 〈天〉(手塚光盛は主の木曾殿の前で)「光盛(自称) こそ今日希代こんにちきたいの曲者くせものに組んで首を取ってござれ。何と名のれと責めてござれども、…」と申したれども、171-4

〈斯〉…「光盛こそ今日希代ノ曲者ニ組テ討テ候ヘ。…」…、434-9

〈小〉…「光盛こそ今日希異まノ曲者クセニ組テ討取テ候ラヘ。…」…、

- ② 〈天〉人が参って、「当時都に聞こえまらした仏御前こそ参ってござれ」と、(清盛に)申したれば、95-2

〈斯〉人が参マイリて、「当時都タウシミヤコニキコヘ候フ仏御前こそマイリテ候ヘ」ト(清盛に)申ケレハ、19-4

〈高〉人まいつて、「当時都タウジにきこえ候仏御前こそまいつて候ヘ」と(清盛に)申ければ、

- 〈参考〉戦場において、相手(敵側)を降伏するように褒めて敬語を用いることもある、用例(3)。また、相手が何者かを知るために尋ねる場合も同様である、用例(6)。

〈天草版平家〉を『平家物語』の室町時代の口語訳、問答形式の対話体という視点から、日本語の係結の変遷、作品の特色などを把握しようと努めた。興味ある問題として、この節では、「こそ…ござれ」の表現を中心に、作品の二重構造をも参考に調査した。

- ① 〈天草版平家〉の喜一。と右馬の允の二人の会話、② 『平家物語』の世界の展開、

(i) 主として②の(地の文)(ア)と①の(会話文)との関連

(ii) 主として②の(会話文)(イ)と①の(会話文)との関連

そして、ハビヤンによって作成された〈天草版平家〉の文体の特色を「こそ…ござれ」を中心にして把握しようと試みた。

なお、ハビヤンの著作には〈天草版平家〉の他に『妙貞問答』『破提字子』がある。これらはいずれも対話体の問答形式での制作という意図が共通している。話者としての人物の配置を考えると、〈天草版平家〉は男性同士で琵琶法師と武家、『妙貞問答』は浄土宗の尼僧とキリシタンの修道女、『破提字子』は儒家の「親友」と反キリスト者という違いがある。また、ハビヤン自身も禅寺で育ち、19歳でキリシタンとなり、イエズス

会に入会した。そして1592年に〈天草版平家〉の序文を執筆し、1605年に護教書『妙貞問答』を執筆した。が、1612年には棄教して『破提字子』を執筆した。著者自身の思想的な展開も考慮しなければならないが、ここでは各作品の文末語にしぼってみると、〈天草版平家〉は「ござる」体、『妙貞問答』は吉田本が「侍り」体で、修正した神宮本は「候ふ」体ということになろうか。又、『破提字子』は断定的文体が多く、特に動詞終止・助動詞終止(「也」体)が目立つ。

6 終りに

1. 〈天草版平家〉の原拠本の本文は現存の『平家物語』諸本と比較すると、十二巻本の3種類が用いられていることが確認できる。

〔イ〕の範囲は『平家物語』(巻一～巻三)〈竜大本〉などの覚一本系

〔ロ〕の範囲の前部は『平家物語』(巻四～巻七)、

後部は『平家物語』(巻九～巻十二) 〈斯道本〉などの百二十句本系

〔ハ〕の範囲は『平家物語』(巻八) 〈竹柏園本〉〈平松本〉など

『平家物語』諸本のうちの現存本を〈天草版平家〉の本文と比較すると、最も近いのは相対的には〔ロ〕の範囲の〈斯道本〉(その中でも二次本文:断片)である。が、〈斯道本〉はこの範囲の原拠本そのものではない。

2. 「あり明の月」の和歌は係結が「こそ…しが(xiga)」で最後の音節が濁音である。
〈斯道本〉には結びの語句に濁点がない。しかし、それに近い〈小城本〉〈鍋島本〉には存する。〈斯道本〉は原拠本そのものではないが、この節の追記に記したように他の箇所「コソ…シガ」の例が存するので、〈天草版平家〉のこの箇所の結びの「しが(xiga)」と矛盾しない。韻文においても「コソ…已然形終止」の形式が崩れはじめていた根拠になる。
3. 「ゾ〈係助〉」から「こそ〈係助〉」への書き替えには、〈竹柏園本〉〈平松本〉などに既に「コソ〈係助〉…(候ハ)メ」など〈天草版平家〉の「こそ(ある)らう」(口語・終止形)へと変化する中間的過程を示すものも見られる。
4. 「沖にこそ沈ませられた(終止形)」は、〈斯道本〉の「^{ヲキ}奥ニコソ沈ミ玉ヒヌ」の係結の崩れたものという説明では理解しがたい。〈竜大本〉の「^フいつくに沈み給ひけむ(連体形終止)」などとの校合を経て原拠に近い文が成り、口語訳によって「た(口語・終止形)」に変化したと考えたい。
5. 安田論文は〈天草版平家〉の口訳者ハビヤンの序文の「力の及ぶところ」を一般に

通行している解釈のように、本書（原拠本）の言葉を違えず書写することに全力を尽くすという構えで立論している。しかし、私は遠藤和夫氏⁹⁾のように、イエズス会の外国人宣教師たちが日本語を学習するためのテキストとして、理解可能と思われる箇所は原文通りに、難解な部分や「テニハ」は口語に書き直したものであるという解釈の方法を取り入れて柔軟に考えたらと思う。

又、〈天草版平家〉の会話文は原拠本でも会話文、そこでは「こそ…已然形終止」の形式が保たれ、地の文ではコソを削除したり、已然形を改めたり、ゾを「こそ」に改めたりしている。「こそ…已然形終止」は現実の統語機能からの逸脱、あるいはハビヤンの用法における異例としている。しかし、[口]の範囲の原拠本として取り上げただけでも〈斯道本〉一本をそのものであるとは確定できない。私は現存の『平家物語』の古写本・古版本を100種類以上にわたって調査し、表1のように整理した。しかし、文体や統語機能の実態は安田論文が述べているほど整然としたものではない。

〈天草版平家〉は各々の範囲とも原拠本を現存本の一本と確定することができないので、現在の段階では原拠本に近い諸本からその本文を推測せざるをえない。前記の「こそ…しが」「コソ…（候ハ）メ」「た（口語・終止形）」の3例もまた「こそ…已然形終止」ではないが、統語機能からの逸脱とかハビヤンの用法における異例では説明できない。5節の「こそ…ござれ」がハビヤンの文体の特色を比較的はっきりと表わすものであり、上記の3例もまた〈天草版平家〉の音韻・語彙・語法の特色を総合的に担っている語群であると言えよう。

付記 安田論文に対して批判的立場からの論じているものとして、小島幸枝著『キリシタン文献の国語学的研究』¹⁰⁾がある。次の機会に合わせて論じたいと考えている。

『平家物語』諸本とその略称・略号

（『天草版平家物語』の原拠本、および語彙・語法の研究』で調査したものを一部掲載する。）

◇『天草版平家物語』〈天草版平家〉〈天〉大英図書館蔵、原本・影印本（勉誠社文庫7・8）。原本はローマ字綴りであるが、便宜上、漢字平仮名交りに翻字して示した。

○一方流

▽覚一本系〈覚〉

〈竜大本〉〈竜〉竜谷大学附属図書館蔵、影印本、写真。（「祇王」の章は欠。日本古典文学大系『平家物語』上・下（昭34・35刊）は〈高野本〉で補う。）

〈高野本〉〈高〉東京大学国語研究室蔵、原本、影印本（『高野本平家物語』笠間書院、

昭49刊)。

〈西教寺本〉〈西〉卷一は大東急記念文庫蔵、原本。卷二以降は西教寺蔵、山下宏明氏所持の写真。

〈陽明本〉〈陽〉陽明文庫蔵、写真(国文学研究資料館で確認)。

〈慶長古活字本〉〈慶古〉大東急記念文庫蔵、写真。

▽葉子本系〈葉〉

〈米沢本〉〈米〉米沢市立図書館蔵、写真。

〈早大本〉〈早〉早稲田大学付属図書館蔵、原本。田中穂積氏寄贈(昭和20.11.10.)。

〈京資本14〉京都府立総合資料館蔵、写真。

〈愛知県大本〉〈愛県〉愛知県立大学付属図書館蔵、原本・写真。卷六後半・卷七・卷十・卷十二は下村本の本文。

〈内閣本〉〈内〉内閣文庫蔵、写真。

▽下村本系〈下〉

〈加賀本〉〈加〉東京都立中央図書館蔵、原本。

〈東大国文本9〉〈東大9〉東京大学国文研究室蔵、写真。旧楽歳堂文庫蔵。

〈昭女大本〉〈昭女〉昭和女子大学付属図書館蔵、原本。

〈駒大本26〉〈駒26〉駒沢大学付属図書館(沼沢文庫)蔵、原本。

〈学習院本3〉学習院大学国語学国文学研究室蔵、原本。

▽流布本系〈流〉

〈駒大本27〉〈駒27〉駒沢大学付属図書館(沼沢文庫)蔵、原本。

〈元和7刊〉元和七年刊本(1621)早稲田大学付属図書館蔵、原本。

〈元和9刊〉元和九年刊本(1623)大東急記念文庫蔵、写真。

〈万治2刊〉万治二年刊本(1659)神宮文庫蔵、写真。

〈元禄12刊〉元禄十二年刊本(1699)愛知県立大学付属図書館蔵、原本。

〈享保12刊〉享保十二年刊本(1727)『改正絵入平家物語』高松松平文庫蔵、写真。

▽平曲譜本

平家正節〈尾崎本〉尾崎正忠氏蔵、原本・影印本(大学堂書店、昭49刊)。

平家正節〈東大本〉東京大学付属図書館蔵、原本、写真。

平曲正節〈京大本〉京都大学文学部蔵、影印本(臨川書店、昭46刊)。

◇百二十句本など

〈斯道本〉〈斯〉慶応義塾大学付属斯道文庫蔵、原本、影印本(『百二十句本平家物語』昭45刊)。
〈斯〉一：同上第一次本文。
〈斯〉二：同上第二次本文。

〈小城本〉〈小〉佐賀大学付属図書館蔵、影印本（『小城鍋島文庫本平家物語』汲古書院、昭57）。

〈鍋島本〉〈鍋〉天理図書館蔵（鍋島家旧蔵）、写真。

〈国会本〉〈国〉国立国会図書館蔵、写真・影印本。

〈京都本〉〈京〉京都府立総合資料館蔵、写真。

〈久原本〉〈久〉（佐賀本とも）佐賀県立図書館蔵、影印本（二松学舎大学出版部、昭60刊）。

〈竹柏園本〉〈竹〉天理図書館蔵、影印本（天理大学出版部、昭53刊）。

〈平松本〉〈平〉（平松家本とも）京都大学図書館蔵、影印本（古典刊行会、昭40刊）。室町時代末期書写。

〈享禄本〉〈享〉『享禄書写鎌倉本』文化庁蔵、影印本（汲古書院、昭47刊）。

〈鎌倉本〉〈鎌〉『鎌倉本平家物語』彰考館文庫蔵、影印本（汲古書院、昭47刊）。

〈屋代本〉〈屋〉国学院大学付属図書館蔵、影印本（『屋代本平家物語』貴重古典籍叢書9（角川：昭53再））。

○増補系

〈延慶本〉（大東急）大東急記念文庫蔵、原本。影印本（『延慶本平家物語』汲古書院、昭58刊）。

著書・論文

（本稿に直接記さなかったものも一部掲載する）

（サトウ：明21）アーネスト・M・サトウ『日本耶蘇会刊行書誌』（Jesuit Mission Press in Japan）私版本。復刻版は大15刊。

（亀井：昭2）亀井高孝翻字『天草本平家物語』岩波書店刊。

（土井：昭9）土井忠生著『近古の国語』（国語科学講座31）明治書院刊。

（土井：昭30）土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』三省堂刊。原本は、Arte da Lingoa de Japam. 3巻1冊。（1604～1608）イエズス会、長崎学林刊。

（渥美：昭37）渥美かをる著『平家物語の基礎的研究』三省堂刊。

（亀井・阪田：昭41）亀井高孝・阪田雪子（翻字）『ハビヤン抄キリシタン版平家物語』吉川弘文館刊。（再版は昭55）

（山下：昭43）山下宏明著「平家物語百二十句本再考」、古典文庫『平家物語百二十句本』四に所収の解説。

（汲古：昭45）『百二十句本平家物語』慶応義塾大学付属斯道文庫蔵本の影印。汲古書院刊。

- (山下：昭47) 山下宏明著『平家物語研究序説』明治書院刊。
- (清瀬：昭57) 清瀬良一著『天草版平家物語の基礎的研究』溪水社刊。
- (山下：昭59) 山下宏明著『平家物語の生成』明治書院刊。
- (近藤：昭60・7) 早稲田大学中央図書館にて〈早大本〉を発見。
- (小島：平6) 小島幸枝著『キリシタン文献の国語学的研究』武蔵野書院刊。
- (近藤ほか：平8、9) 近藤政美ほか『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』(自立語篇)
 (付属語篇) 文部科学省助成出版、勉誠出版刊。
- (近藤ほか：平11) 近藤政美ほか『天草版平家物語語彙用例総索引』文部科学省助成出版、勉誠出版刊。
- (近藤：平20) 近藤政美著『天草版平家物語の原拠本、および語彙・語法の研究』和泉書院刊。
- (小林：平21・10) 上項の近藤著『天草版平家物語の原拠本、および語彙・語法の研究』に対する小林千草氏の書評。『日本語の研究』第5巻4号掲載。

注記

- 1) (小林：平21・10)
- 2) 金葉和歌集 第五番目の勅撰和歌集。白河上皇の院宣で源俊頼(平安後期の歌人)の撰。大治2年(1127)成立。
- 3) (亀井・阪田：昭41)
- 4) (近藤ほか：平11)
- 5) 『天草版平家物語』大英図書館蔵、原本・影印本(勉誠社文庫7・8)。原本はローマ字綴りである。(近藤ほか：平11)
- 6) (山下：昭47)
- 7) (井上・鎌田の論文)

(佐藤：昭51) 井上章「浪ばかりこそ寄ると見えしが」考—中世におけるコン係結法の一側面—『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社刊。

(鎌田：昭57・2) 鎌田広夫「浪ばかりこそ寄ると見えしが—天草本平家物語の場合—」『国語研究』45号。
- 8) (土井：昭30)
- 9) (遠藤：昭53・3) 『天草本平家物語』おぼえがき『成城大短大部紀要』9号
- 10) (小島：平6)。